

特集

# ただいま おかえり

農家民泊から見た田舎の底力

## 修学旅行生405人が 西諸の農家に宿泊

「ようやくこの日を迎えられた。必ず成功させて実績を重ね、5年後には1万人を呼べるよう頑張る」。

まちの活性化を目的に、農家民泊や農業体験などの体験型観光を推進する「北さきしま田舎物語推進協議会」が誘致した修学旅行。その第一弾を5月13日に受け入れ、同協議会の清水洋一会長は展望を語った。

民泊型修学旅行の本格的な受け入れは県内初。同協議会は今年6月までに、4校405人を受け入れた。本県への修学旅行生が、ピーク時の5万5千人から千人程度に減少している中、県も、農漁村の豊富な資源を生かせる民泊の効果が期待を寄せる。

九州の中心に位置し、隣県にも近い本市の地理的優位性に加え、受け入れ農家が体験中の安全管理を徹底していることが関西の旅行

会社に好評価を受け、同協議会は本年度、兵庫県3校、奈良県1校の誘致に成功。2006年発足当時から行ってきた地道なPRが実を結び、来年度もすでに6校約千人の受け入れが決定している。

「民泊の受け入れは多くの効果がある。なにより交流が楽しい。都会の子どもたちは、田舎のなにげないことに感動し、自分たちが気づかない田舎の価値を気づかせてくれる」と話すのは、同協議会の加藤シゲ子さん（＝野尻町東麓）。

新たな人の流れを生み、農家の副収入だけでなく、地域経済への波及にも期待がかかる農家民泊は、近年、全国でも取り組みが増えている。過疎に悩むまちの活性化の起爆剤となり得るからだ。今回は、田舎にしかない、田舎であることの価値を考えてみる。



「農業以外で副収入も入るうえ、新しい出会いで刺激とやりがいも得られる。高齢農家にとっては、孫の年代に近い子どもとのふれ合いが生きがいにもなっている」と民泊の魅力を話す。また、「アイデア次第で、生産物の新しい販路が開けるなど、物販や6次産業化の糸口になる」と富満さん。実際、宿泊客の口コミで、都会のレストランに生産する米を納めたことも。「IターンやUターンのきっかけにもなり、中山間地の発展につながる」と民泊が秘める可能性を追及する。民泊のきっかけはアメリカでの農業研修。農家にホームステイしながら、農業を学び、ひとたび大干ばつが起こると混乱するアメ

とみかてつお 富満哲夫さんは、北きりしま田舎物語推進協議会の設立に関わり、それ以前から、個人で民泊を行ってきた花農家だ。

### 農家民泊の秘める可能性を追求



農家民泊の先駆け 富満哲夫さんの挑戦



### 屋号 生駒ファーム

富満哲夫さん、敏子さん夫妻



哲夫さんがウコッケイの解体など体験のまとめ役とすれば、妻の敏子さんは「母親」役。過度なおもてなしはせず、家事なども手伝わせる。しかるときはしかり、「ある程度の礼儀作法を覚えてかえってほしい」と話す。実家で家事を手伝うようになった子どももいるという

海外や大学の研修生なども受け入れ、これまで富満さん宅に訪れた子どもや大人は、100人を超える。特に都会の人に「風景がきれいで、ご飯もおいしい」と喜ばれた。「自分たちにとっての日常が、来る人に

今回の受け入れという成果に満足することなく、その眼差しは先を見つめる。

### ありのままの農家の暮らしを武器に

リカの食料市場を知った。当時は、1993年の米騒動が起きた時期。否応なく「安心安全な農業や食について考える」転機となった。日本に帰り、農業の傍ら、命の尊さと食べ物の大切を伝えようと民泊を始めた。

「受け入れ農家や体験メニューの質と量を増やせば、自然とお客は増えるはず。お客が増えることで、民泊は儲かるビジネスにもなる。農家の収入を増やし、まちを元気にしたい。」

# 民泊への情熱は未来への第一歩

民泊は、未来を明るくする可能性を秘めている

北きりしま田舎物語推進協議会の中で、修学旅行の誘致に人一倍強い思いを持つ農家がいる。富満哲夫さん（山南西方）。協議会設立前から、先駆けて民泊に取り組んできた。その原点は「農家の収入を増やし、まちを元気にする」ことだ。





保健所による浴室と食品の衛生講習、西諸広域消防本部による救急救命講習の受講を年1回実施。さらに、体験に潜む危険性を洗い出し、その安全対策を話し合う「リスクマネジメント研修会」を開いた。

旅行代理店に強みや思いを積極的にPRした効果もあって、一昨年12月に念願の誘致が決定。関西の中学校4校405人の1泊を取り付けた。

「来年度以降につなげるため、絶対に成功させる」と臨んだ今年の5、6月。万全の準備で迎え入れ、大きな事故もなく、無事成功に終わった。

「来年度は、すでに中学校6校千人の誘致が決まった。今は要望があっても、受け入れ農家が足りず、断っている状態。農家が増えれば」と清水洋一会長。来年に向け、まずは会員増が急務となっている。

- 1 初めて受け入れた修学旅行生との別れ。名残惜しい
- 2 開村式では、横断幕「ゆ きっくいやしたなあ〜」で出迎えた
- 3 確かな絆が芽生えた

INTERVIEW

商工観光課長に聴く「農家民泊」

西諸県から宮崎県・鹿児島県・熊本県へ



商工観光課  
うえんびゅう まさる  
上別府 優 課長

北きりしま田舎物語の皆さんの雰囲気がとても心地いいんです。何でも包み込んでくれる雰囲気なんです。

最近の観光に対するニーズの傾向として、「観る観光」から「体験する観光」へと移行しつつあり、さほど有名ではない農山漁村が旅先になり始めています。

本市の観光最大の命題は「日帰り観光」から「滞在型観光」へということもあり、農家民泊の取り組みは、まさに時代のニーズにマッチした取り組みと言えます。

先日、北きりしま田舎物語推進協議会の皆さんと、宮崎県知事を訪問しました。その時に伝えましたが、農家民泊による修学旅行の受け入れは、市や西諸の枠を超えた事業の可能性があり、協議会が掲げる目標の1万人を達成するためには、宮崎県全域だけでなく、鹿児島県や熊本県とも共同で取り組む価値のある事業だと確信しています。

この大きなビジネスチャンスを逃さず、バックアップしながら、地域の活性化につなげていきたいと考えています。

# 滞在客を呼び込む 農家民泊に挑戦 北きりしま田舎物語推進協議会

田舎という資源を生かしながら、体験型観光という手法で立ち上がった北きりしま田舎物語推進協議会。口蹄疫や新燃岳噴火という試練に耐え、悲願であった修学旅行生を呼び込んだ。「体験型観光で、まちを活性化させたい」。

協議会は今、その夢に向かい、確かな一歩を踏み出した

## 団体客が見込める 修学旅行の誘致

全国でグリーンツーリズムの取り組みが進む中、西諸地区で体験型観光を推進する「北きりしま田舎物語推進協議会」は、個人の農作業体験や農家民泊などを受け入れながら、県外の修学旅行の誘致に力を入れている。

今年、農家民泊型の修学旅行としては県内で初めて

誘致に成功。市内に修学旅行生を滞在させるという大事業を成し遂げた。

同協議会は2006年に

発足。西諸2市1町の会員が、野菜の苗植えや収穫、家畜の世話など、農家の生活を体験できるさまざまな体験メニューを用意し、平成21年度から昨年度までに農家民泊412人、日帰り体験477人を受け入れるなど実績を伸ばしてきた。

さらに、一度に大きな経

済効果が見込める修学旅行に注目。西日本を中心にPRを行ってきた。

## 徹底した安全管理で 勝負をかける

農家民泊で修学旅行を受け入れる地域はどこも自然が豊か。他の地域との競争に勝つためには、差別化が必要になった。同協議会は、「安全面」に対するこだわりで勝負をかけた。





特集／「ただいま おかえり」

### 暑 むっちゃんの宿

真方／名所の三之宮峡、二原遺跡を散策し、季節の野菜を収穫



みやくほりきお むつこ  
宮窪力男・六子さん

### 子育てを再現。体験用の野菜の準備も楽しみ

2人とも元はサラリーマンで、退職と同時に民泊を始めました。子どもたちには自分で料理を作らせます。また夜は、じっくりと団らんするため、子育てを再現しているみたい。また、小さな菜園でもできるのが民泊の良いところです。今では、修学旅行生を迎える時季に合わせた野菜を考え、準備するのが楽しみ。迎え入れた子どもたちが、大人になって、また遊びに来てくれることを期待しています。



自分で火を起こした七輪で、焼いて食べる団子には、子どもも大喜び

### 暑 くすの樹

須木内山／大自然を満喫し、牛のシャンプーや餌やりを体験



ゆういちろう  
祐一郎さん  
くろきりよういち とよこ  
黒木領一さん・豊子さん

### 「自分のためにやっている」 そう思えるほど、楽しみ

人の子を預かることは不安でしたが、いざ迎えてみると「案ずるより産むが易し」でした。子どもたちは、全てのことに感動し、反対に私たちを喜ばせてくれます。今では「自分のために民泊をしている」と思えるほど。日常に張りができて、充実しています。内山は、小・中学校が廃校になり、子どもの姿を見かけることが少なくなった地域。修学旅行生が来ることで、内山も明るくなります。



牛のブラッシングを体験。子どもは意外と牛を怖がらないという

### 暑 けやき

堤／裏庭は植物と果樹の宝庫。EM菌を使った米と野菜も自慢



かわのてるお  
川野輝夫さん・のぶ子さん

### 子どもや会員の交流が やりがいにつながる

退職して、子育ても終わり、元気なうちに何かしようと思ひ民泊を始めました。仲間と多くの修学旅行生を受け入れるという、同じ目標に向かっていけること。これが楽しい。また、お互いに技術を教え合う勉強会や研修会で、たくさんの農家と出会えました。農家の生活を教えるのは楽しく、野菜嫌いの子が「おいしい」と喜び、手紙などでお礼をもらうと「また頑張ろう」という気持ちになれます。



自作のEM菌を使った菜園。安心安全な野菜を収穫し、その場で味見

### 暑 おしげさんの宿

野尻町東麓／特設した体験小屋で、電気を使わない農家体験を



やましたたかこ かとう  
山下孝子さん・加藤シゲ子さん

### 近所の助けをもらうことで 地域も明るくなる

都会の子たちは、田舎の当たり前の風景に感動し、喜んでくれます。例えば、虫の鳴き声、枯れた杉の葉で火を起こすことや暗闇の中で見る火の明るさなど。私たちが気づいていない魅力を教えてくれます。また、時季によっては、近所の農家のハウスなどに連れて行き、体験に協力してもらっています。集落に響く若い子どもたちの声につられ覗きに来る人もいますし、地域の交流にもなっています。



解放感のある体験小屋「イブリアイトの家」でラッキョウ漬物づくり

# わたしと農家民泊

「地域活性化に二役」、「サイドビジネスに」、「生きがいになる」…  
動機は人それぞれでも、民泊に対する情熱は変わらない。  
4家庭の話に耳を傾けると、民泊の魅力がもっとよく分かるはず。



## PICK UP

### 子どもたちから届く「ありがとう」の便り

「本当に楽しかったです。次はいつ会えますかね?」「母さんのご飯をまた食べたいです。」「受験が終わったら遊びに行きます。」…

受け入れ農家が、民泊を続けようと思う理由のひとつに、手紙や電話で届く「感謝の言葉」がある。

「すごく楽しかった!」宮窪さん宅で受け入れた修学旅行生の中で一番大人しかった子が、帰ってすぐ電話をかけてきたという。1泊2日という短い間でも、体験する子どもにとっては、第2、第3の故郷ができ、受け入れ農家は、新しく孫や子どもができたような体験ができる。

黒木さん宅で受け入れた子は「まだ帰りたくない」と言い残し、帰っていった。こういった「心の交流」がリピーターを呼び、また農家の生きがいにもなっている。

宮窪さん宅に届いた残暑見舞い

